

ネットジェネレーションの期待と自覚

環境情報学部教授 熊坂賢次

1. ジェネレーション・ラップ

身近なところでの話であるが、『growing up digital-The Rise of the Net Generation(邦訳; デジタル・チルドレン)』という本が話題になっている。これは、新しいネットワーク環境のなかで、いままでのテレビ世代とは明らかにライフスタイルが異なった世代が登場してきた、というもので、「ネットジェネレーション(N-Gen)」というネーミングに示されるように、メディアの視点から世代論を論じた著作である。著者タプスコット(D.Tapscott)は、ネットワーク環境を自明なものとして行動する新しい世代は、親たちのテレビ世代との世代間ギャップを軽く飛び越え(これを、彼は "generation lap"と呼ぶ)、まったく新しいユースカルチャを形成している、と主張する。

ここで言及される多くの事例報告はそれなりに説得的ではある。たとえば、ネットジェネレーションを、Independence/Openness/Expression/ Investigation などの特徴をもつと指摘している。もちろん、このようなアドホックな特徴の列挙だけで、ネットジェネレーションのイメージが浮かび上がるはずはなく、ジャーナリストらしく、これでもかというほど、ネットジェネレーションの発言や行動を引用して、かれらのライフスタイルを鮮明にしている。ここでは、インターネットを駆使して遊んだり学習したりするネットジェネレーションの生態がしっかりと立証されている。

本稿では、このような多様な事例報告をもとにしたネットジェネレーションワーク環境が規定する行動・関係・領域について考えてみたい。それは、ネットジェネレーションが期待するネットワーク社会はどのようなものであるか、を確認する作業である。

ネットジェネレーションの期待と自覚

環境情報学部教授 熊坂賢次

2. 露出と覗きの快感 - 拡散し融合する個人 -- (1)

最初は、「露出と覗きの欲望の解放」という、ちょっといかがわしいところから始める。これは、ネットジェネレーションの学生の行動を観察していると、かれらが自分のホームページに凝るほど、どんどん自分の世界をさらけ出すようになる、という発見？から、考えたことである。もちろん、載せるコンテンツが極端に乏しいから、苦し紛れで自分の秘密を暴露するとも考えられるが、にもかかわらず、そこにネットワークでコミュニケーションをすることの本質？が隠されているような気がする。かれらのウェブでの行動をみると、あきらかに自分の秘密を露出する傾向があるし、同時にネットワークの中をサーチしながら、他人の秘密を覗き見している。

露出症と覗き癖は、自分と他人の間に引かれた境界を超えるという意味では同じ特性で、境界を超える方向が違うという点では対照的な関係にある。この2つの欲望は、ネットワーク環境以前の段階では、自他の境界を安易に超えるという理由で、「悪い」行為とされていた。

そこで整理をする。行為論の視点から、まず露出とは「私の私的なことを公にする」こと、そして覗きとは「他人の私的なことを私のものにすること」とする。ここから一般的な行為のフレーム、「誰（客体）の、どんな行為を、どのように方向づける」を提示する。とすると、ここに3つの弁別軸が設定できる。最初は、客体が「自分（私）か他者か」、つぎは行為領域が「私的か公的か」で、最後は、方向づけが「私化（私的な扱いをする）か公化（公にする）」であるすると、図1に示すように、8つの行為類型が導出できる。

（類型1-1: 私有）自分の私的なことを私化する。

これは、自分のことだから、自分の世界に閉じこめ、外部にはオープンにしないという行為である。通常のプライベートな行為がこの類型に相当する。

（類型1-2: 隠蔽）自分の公的なことを私化する。

これは、社会的な責任がある（公的な自分）ので、本来は公開すべき自分のことなのに、自分の秘密として隠してしまう行為である。これは社会的には許されない（非許容）行為である。

（類型2-1: 露出）自分の私的なことを公にする。

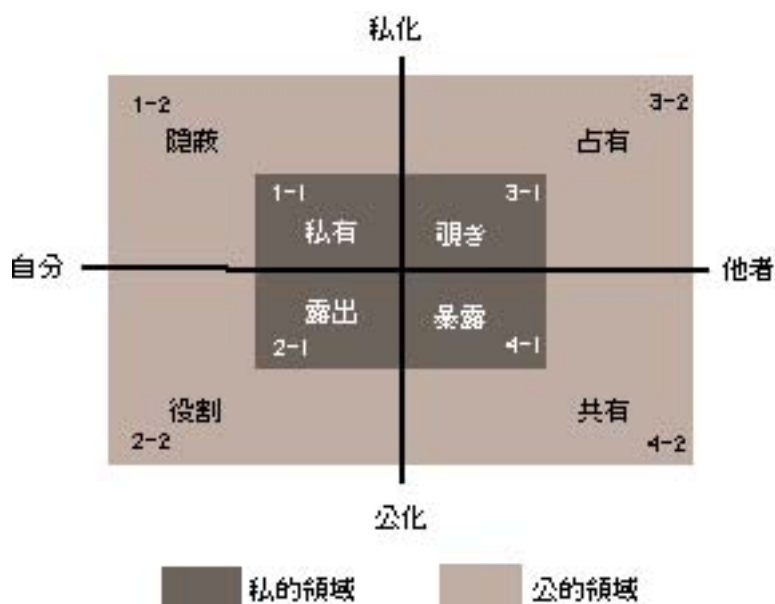
これは、本来はプライベートな行為であるはずなのに、外部に向かってその行為をオープンにする行為で、自分の恥部？を平気で『露出』することである。ネットジェネレーションの間では、ウェブが話題になった当初、自分の日記を公開することがブームになり、いまでもそれはウェブの世界では了解された行為になっている。これはウェブでの新しいルールに適合した行為である。だとしたら、ウェブでは露出する行為は社会的に許容されている。

（類型2-2: 役割）自分の公的なことを公にする。

これは、自分の社会的な役割を全うする行為で、社会的な責任の遂行である。

（類型3-1: 覗き）他者の私的なことを私化する。

これは、他人の秘密を自分だけが知る行為である。本来ならば他人のプライベートな行為だから、見てはいけないのであるがそれを自分のものにしてしまう。行為で、『覗き』である。



ネットジェネレーションの期待と自覚

環境情報学部教授 熊坂賢次

2. 露出と覗きの快感 - 拡散し融合する個人 -- (2)

ネットワーク環境以前ならば、これは許されない行為であるがウェブ上では、かなり許容されている。CCカメラを活用したピープホールがセットされた環境では、あきらかに覗くことが許容されている。覗きはウェブ上のルールではかなり許容されている。

(類型 3-2: 占有) 他者の公的なことを私化する。

これは、本来社会に公開されるべき行為や情報を自分のものことで、どのような環境でも非許容的な行為である。

(類型 4-1: 暴露) 他人の私的なことを公にする。

これは、他人の私事を社会的にオープンにすることで、三面記事のように『暴露』する行為である。ウェブ上でも、神戸で殺人事件を犯した少年の顔写真をネットワークにいち早く載せてしまうという行為のように、マスコミの3面記事以上に歯止めのかからない行為が存在している。ただこの行為は、ウェブ上でも許容されてはいない。

(類型 4-2: 共有) 他人の公的なことを公にする。

公的なことを公にすることは、社会的な役割・責任の遂行であるが、この場合は、客体が他人の場合なので、それを、ここでは『共有』と呼ぶ。通常では報道とか広報といった行為がこれに相当する。

以上、8つの行為類型を、社会的な許容 / 非許容の観点から弁別すると、図2になる。ここでは、ネットワーク環境の成立以前と以後で許容性の比較をしている。それをみると、露出(2-1)と覗き(3-1)が、ネットワーク環境では許容になっている。このことは、ネットワーク社会における個人のコンセプトを考えるうえで、非常に大きな意味をもっている。

		ネットワーク	
		以前	以後
1-1	私有	♣	♣
2-1	露出	×	♣
3-1	覗き	×	♣
4-1	暴露	×	×
1-2	隠蔽	×	×
2-2	役割	♣	♣
3-2	占有	×	×
4-2	共有	♣	♣

♣許容的 ×非許容的

まずは、ネットワーク以前では、個人の私的領域は私有(1-1)の領域のみで自己完結する構造になっている。つまりこの個人は、自分の私的な世界をどこまでも閉じて、自他との間に明確な境界を設定している。それがいわゆるプライバシーである。これにたいして、ネットワーク環境では、個人は、露出(2-1)と覗き(3-1)が許容されることで、外部に開かれた存在になっている。露出と覗きは、セットになって新しい個人を生成している。これは、自己を外部化(露出)させ、同時に環境を内部化(他者からの覗き)させることで、自己の拡散をはかりながら、同時に自他の境界を融合させている。これがネットワーク環境に行動する新しい個人(ネットジェネレーション)である。

また、公私の境界の融合は、露出(2-1)と役割(2-2)の間でも発生している。新しい個人の意識では、自分を公にすることに关しては、私的も公的もない。露出も役割も等価である。従来の個人のように、外部に自己を開くのは社会的な役割が明確な場合に限定されるという拘束は、ここにはない。ネットワーク環境は、自己を外部に開くことに关して、私的領域と公的領域の区分を積極的に放棄させる。つまりネットジェネレーションは、公私の境界を融合させることで、個人(内)と環境(外)との関係を一層融合させている。

こうして、自他と公私の融合が許容されることで、自分と環境との反転が容易に行われる。つまり反転とは、自己が外部化され、外部が内部化されることで、あたかも個人それ自体が環境化し、その環境からみつめる個人が新たに生成される、ということである。その個人は旧来の個人の枠を超越させた環境=自己を内部化させており、環境にたいして間主観的な存在として編成された個人である。これが、ネットワーク環境が産んだネットジェネレーションという、拡散し融合する個人である。

ネットジェネレーションの期待と自覚

環境情報学部教授 熊坂賢次

3．探索と支援 - 新しいコミュニケーション作法 --(1)

拡散し融合した個人は、社会環境にたいしてどのようなコミュニケーションをとるのだろうか。新しいネットワーク環境のなかでのコミュニケーションは、いままでのコミュニケーションとはどこが違ってくるのだろうか。それを、つぎに考える。

ネットワーク環境のなかでコミュニケーション行動をとるとき、いままでの情報行動とは異なった、新しいスタイルがネットワーク環境そのものによって規定される。従来の情報行動の基本である、「ある人がある情報を所有している、しかもその情報を必要としている誰かが存在するので、その情報をその誰かに向けて発信する」という「発信－受信」の考え方がネットワークの環境では後退する。

いままでのコミュニケーションの概念からすると、情報の送り手と受け手がいて、その間で情報の発信と受信が行われることがコミュニケーションである、という理解がある。確かにネットワーク環境でも電子メールでは、情報は発信され受信されている。情報が所有されているから、情報が伝達される。それがここでの基本的な考え方である。情報を所有する人としらない人の落差が、コミュニケーションを生成する根拠である。だからその所有される情報の価値が一般（汎用）的かつ希少なものであるほど、その情報の伝達をめぐる経済的な交換とか政治的な権力という社会関係が成立する。これが情報所有を前提とするコミュニケーション形態であり、この形態を基盤にして成立するのが経済的な市場システムや政治的な権力システムである。これが前ネットワーク社会におけるコミュニケーション形態と社会システムとの関係である。

このコミュニケーション形態を規定する基本は、コミュニケーション環境にかんして明確な境界が設定できる、という条件にある。いままでのコミュニケーション論は、その基本のダイアド・モデルとその拡張モデル（マスコミュニケーションはその典型）にみられるように閉じた境界のなかのコミュニケーションを問題にしている。境界が閉じている場合、その内部の主体は相互に認知可能な状態にあるので、コミュニケーションを始動させる動機は、主体が価値ある情報を所有しているかどうかにかかっている。他者にたいして価値ある情報を所有しないかぎり、主体はここではコミュニケーションを始動させることはできない。

しかしネットワーク環境でのコミュニケーションは、いままでとはまったく異なった行動を喚起する。たとえば、インターネットで自分のホームページをつくってみればわかるように、そこでは情報を発信しているリアリティはほとんどない。せいぜい自分のつくった情報をネットワークに公開して、みんなに見てほしい、と願っているだけである。またそれと対照的にページを作成する過程では、サーチエンジンを活用して欲しい情報を探し、ネットワークのなかを徘徊し、自分のほしい情報に当たると、リンクを張ったりコピーをして、そこに新しい自分（ホームページ）を作成する。

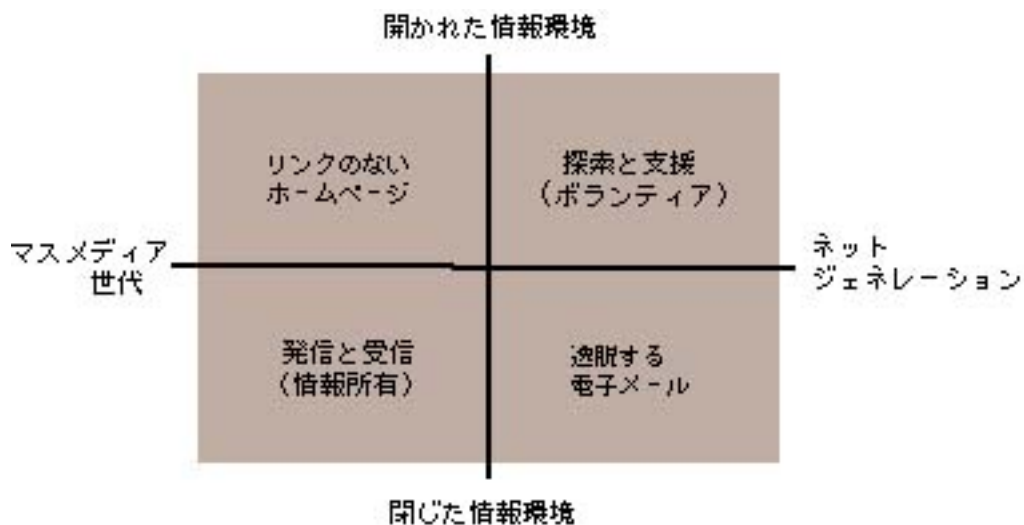
ここにあるのは、ネットワーク環境では、誰でもがみんなに助けられているし、またみんなをささやかだけど助けている、というリアリティである。相互に情報探索しあい、相互に情報支援している。ここでは情報の受発信の価値はあきらかに後退し、情報の『探索と支援』の関係性が重要な意味をもつ。ネットワーク環境は、そのコミュニケーション環境が世界中に無限に「開かれた環境」であることで、探索と支援のコミュニケーションを優先させる。そのとき、リンクは情報支援の相互性のシンボルである。リンクのないホームページは、なんのためにネットワークのなかに生きているのか、その存在の意味がわからない。リンクをはらないですむようなホームページならば、ネットワークにわざわざ載せる必要はない。リンクがあることで、相互に支援しあってネットワークを維持している。リンクは、自分（ホームページ）の境界を超えて、自分を拡張させ、同時に自分をネットワーク環境に融合させる手段である。リンクをはる・はられるという関係こそ、「ネットワーク環境は開かれた環境である」ことを証明するものである。

「探索と支援」の新しいコミュニケーション形式は、ネットワークが開かれているという環境条件ばかりでなく、主体の条件をも必要とする。図3に示すように、新しいコミュニケーション形式が支持されるには、開かれた環境とその環境を自明として行動できるネットジェネレーションの存在が不可欠である。ネットジェネレーションのように、自分の拡散と社会環境との融合を求めるからこそ、他者との相互支援は自然なコミュニケーション行動の根拠になりうる。つまり「覗き」は探索行動を積極的に支持し、「露出」は情報支援を自明なものと承認する。この2つの新しい特性が探索と支援のコミュニケーションを正当化する。したがってかつての個人（マスメディア世代）には探索と支援のコミュニケーションを起動させる内的な根拠がない。だから、かれらがネットワーク環境にいても、戸惑いと苛立ちを感じるだけである。それは、あたかも「リンクのないホームページ」を作成して、これが自分だと主張しているようなものである。それが、自立（孤立）する個人なのである。

ネットジェネレーションの期待と自覚

環境情報学部教授 熊坂賢次

3. 探索と支援 - 新しいコミュニケーション作法 -- (2)



対照的にネットジェネレーションが閉じた環境でコミュニケーションをすると、従来のルールを破って、節操のない自分をさらけだした電子メールを送りつける、という事態が頻繁に起こる。対面的な環境ならば、真面目な行動がとれても、電子メール環境になると、たとえそこは閉じた環境でも、その背景にある大きな情報環境がネットワークなので、どうしても露出する自分が前面にでてきてしまう。こうして、ネットジェネレーションの電子メールの世界は、今までの常識からは逸脱したコミュニケーション形態をとるのである。

こうして、新しいコミュニケーションの作法が誕生する。ネットワーク環境は、ネットジェネレーションの行動に適合して、情報共有を基本にした「探索と支援」のコミュニケーションの形態をもたらす。開かれた環境と新しい個人の登場は、ネットワーク以前の「情報所有を基本にした情報の送信と受信」の形態の地位を剥奪して、まったく新しいコミュニケーション形態を誕生させる。ここでは、情報を所有していないことがコミュニケーションの起点になる。自分のほしい情報を所有していないから、ネットワーク環境を活用して、情報を探索し、その結果、支援されて、情報を獲得する。この関係が、相互的に実行されるのがネットワーク環境である。

とすれば、この環境が規定する行動規範は、いわゆるボランティアの精神である。新しい個人はネットワーク環境で探索と支援のコミュニケーションの関係において、拡散と融合を求める行動をするとき、かれは否応なしにボランティアとして行動している。覗きと露出が許容されるからこそ、探索と支援を重視するネットワーク環境にたいして、新しい個人はボランティアになれるのである。それは、純粋な心(やさしさ)の問題ではなく、ネットワーク環境とコミュニケーションの形態との制約のなかで、ボランティアにならざるをえない、ということで、強く社会システムの問題である。こうして、ネットワーク環境は、いままで自明とされていたコミュニケーション論の基本フレームに大きな変革を迫るのである。

ネットジェネレーションの期待と自覚

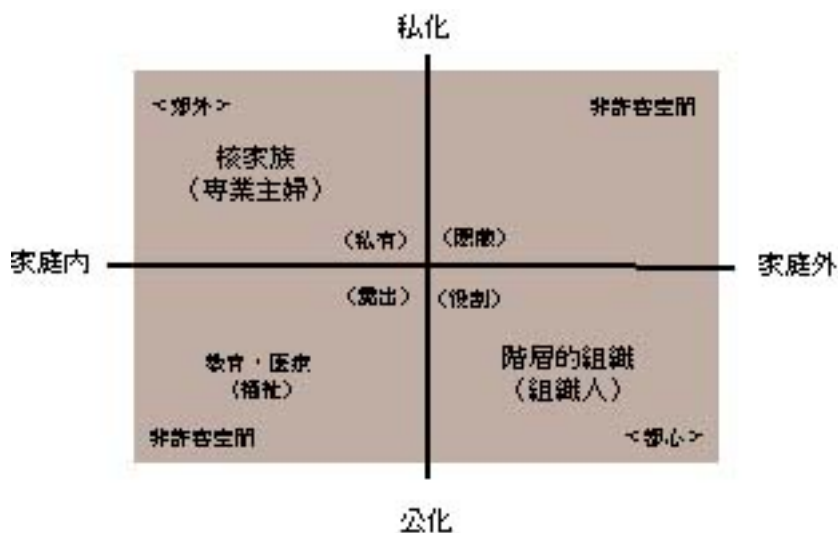
環境情報学部教授 熊坂賢次

4．携帯家族とネットコミュニティ -新しい生活領域のヴィジョン --(1)

ネットワーク環境は、新しい個人とコミュニケーションのありかたをもたらした。ならば、それは、さらにどのような生活のありかたをもたらすのだろうか。すでに仕事の環境である組織にかんしては、階層的組織はネットワーク組織への交代を要請されている。ならば、核家族はどうなのだろうか。最後に、この点を考えてみる。

前述した枠組を利用すると、「自分」を「自分の家族」に特定化しさらに「私的領域」と「公的領域」の対照性を「家族内」「家族外」に特定化すると、図4になる。まずネットワーク以前の生活領域は、核家族と階層的組織のセットから構成されている。核家族は専業主婦が私有する領域である。それは家事や育児や介護に専念する生活領域で、そこでは専業主婦がすべてを家庭の内部で管理し処理しなければならない。これらを外部にみせること（露出）は、専業主婦にとっては許容されない。完全に内部で処理することが、専業主婦としての役割期待である。専業主婦にとって、露出は恥である。ただし、露出にかんして、2つの領域が例外的に許容されている。それが、子供の教育（小中学校の義務教育）と、病人（とくに高齢者）に許容される医療の領域である。ここでの例外の根拠は、子供には成長（家族の外にでる）が期待され、医療には専門家への依存が不可欠だからである。基本的には、家庭内のことは専業主婦によって家庭内で処理されなければならないが、上記の例外の場合のみ、核家族からの露出が社会的に許容される。その例外を支援するのが地域社会（福祉）と地域行政（福祉行政）であるが、それらはあくまで核家族を補助する社会領域にすぎない。

つぎに家庭外にかんしては、そこは家庭を忘れた組織人（家庭に戻れば主人）が仕事をする階層的組織の世界で、核家族（私有）とは対極の位置（役割）にある。この組織は、家庭の内部に仕事を持ち込むこと（隠蔽）を許容しない。仕事は、あくまでも組織の内部で管理され処理されなければならない。ここには、露出の場合のような例外的な領域はない。仕事を家庭に持ち込むこと（隠蔽）は男の恥である。



このように、核家族と階層的組織は、互いに干渉することなく内部で閉じており、内と外の機能分化は明確である。しかもその機能分化は空間的には「都心」と「郊外」に対応し、ジェンダー（性役割）としては「女らしさ」と「男らしさ」に対応している。ここでは、強固な境界が、核家族と階層的な組織それぞれに設定され、安易な融合を拒否している。これがネットワーク以前の生活領域における機能分化の論理である。

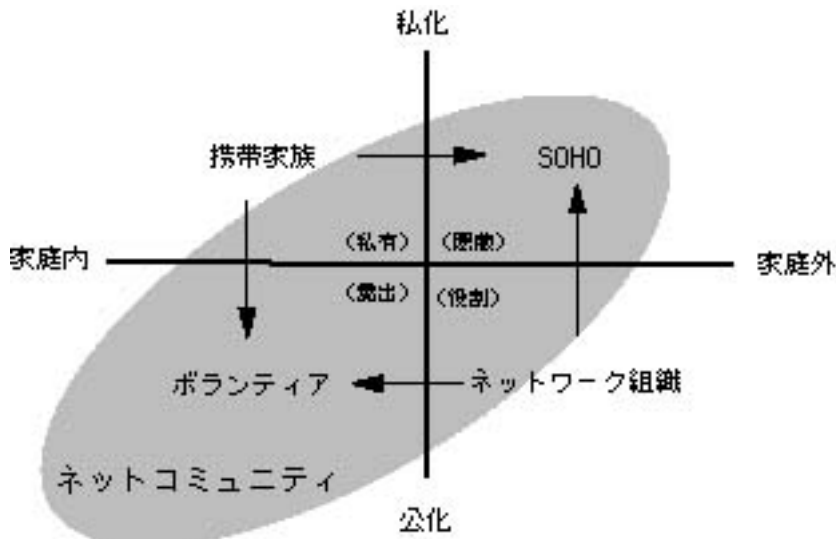
これにたいして、図5に示すように、ネットジェネレーションは、まったく新しい生活領域のありかたを求める。それが、ネットワーク組織と携帯家族のセットである。ここでは、組織と家族は相互の領域を拡散させ、かつ融合させている。そこでは、それぞれの領域の境界自体が柔軟に設定され、さまざまな状況に対応してダイナミックに変容する可能性が保たれている。その柔軟性を確保するのが、役割分化ではなく、役割融合の考え方である。つまり「男は外で働き、女は内を守る」という役割分化がここでは否定され、仕事も家事も育児も、性差に関係なく、また家族役割（主人が主婦か）に関係なく、なんでも生活のことはそれなりに自分ひとりでこなす、という役割融合が期待されている。役割融合がネットジェネレーションの自律を求める。

ネットジェネレーションの期待と自覚

環境情報学部教授 熊坂賢次

4．携帯家族とネットコミュニティ -新しい生活領域のヴィジョン --(2)

その結果、いままでとは違って、露出と隠蔽の領域が社会的に許容され、積極的に生活領域に取り入れられるようになる。露出にかんしては、子供の育児や高齢者の介護の問題が、家庭の私的な領域から公的な領域にはきだされ、家族を超えたところで支援されるようになる。携帯家族では、フルタイムで働く女性が主婦役割を担うから、専業主婦以上に家庭の内部で、育児や介護を処理することは困難である。だからこそ、新しい主婦（融合主婦）は、育児も介護も家庭の枠をこえたコミュニティのなかで、問題の解決をはからなければならない。このとき、かれらは個人の好みに関係なくボランティアになる。かれらは相互に、自分の家庭のことを公の空間（コミュニティ）にはきだすことで、お互いの家庭のことを支援する関係に入らざるをえない。露出が社会的に許容された一つの生活領域になることで、家庭を超えたコミュニティが制度として必要とされ、さらにはそこで相互支援をするボランティアとしての役割が期待される。それが、ネットジェネレーションが家庭をもつことを支援する根拠である。かれらには、閉じた家族は似合わない。家族は外部との融合と拡散を求める。それが携帯家族である。



他方、隠蔽領域にかんしては、仕事が家庭に進入してくる。SOHOとかモバイル・オフィスという考えがこれに相当する。ネットワーク以前では、恥でしかなかった仕事が家庭に戻って、正当な地位を獲得する。家庭で仕事をする大人は、かつての無能な主人＝夫ではなく、家庭を支える頼もしい大人である。ここには組織人の顔はなく、家庭での役割と組織での役割が融合した新しい顔（融合主人？）になっている。したがって流行のSOHOとかモバイル・オフィスは、今までの組織を単純に家庭に内部化させるのではなく、家庭との融合の視点から組織と仕事のあり方を再構成した環境を提示するものでなければならない。それが携帯家族には不可欠なことである。

しかもこのような携帯家族にみられる境界の拡散と融合は、基本的にはネットワーク環境の支援がなければ、まったく機能しない。つまりネットワーク組織ばかりでなく、携帯家族も、またボランティアもSOHO、すべてネットワーク環境を前提としないかぎり有効に機能しない。それは、機能の拡散と融合をもたらす、もっとも重要な社会基盤がネットワーク環境だからである。組織も、家族も、その機能を拡散・融合させるには、ネットワーク環境それ自体がもつ拡散と融合の機能に依存しなければならない。その上で、組織も家族も、新しい方向性を実現できるのである。

そして最後に、ネットワーク環境に支えられたコミュニティ（ネットコミュニティ）が、ネットワーク組織と携帯家族を媒介する第3の生活領域として立ち上がってくる。従来、教育と医療に限定され、かつ弱者擁護の視点から地域行政が補助的・残余的にしか機能していなかった領域（露出）が、ネットワーク環境では、それ自体で自律化しかつ領域拡大（隠蔽をも含む）をして、新しい生活領域として社会的に正当化される。このとき、携帯家族とネットワーク組織のもとで生活するネットジェネレーションは、必然的にネットコミュニティのなかではネットボランティア＝ネットワーカーとして活動する。SOHO環境で仕事（ネットワーカー）をしながら、同時にコミュニティにたいしてはネットボランティアとして活動する、その両方の役割が、家族と組織の両方の視点から期待されるとき、ネットコミュニティは第3の生活領域として社会的正当性を獲得する。それは、ネットジェネレーションに期待される生活のヴィジョンであり、これからの大きな政策課題である。

ネットジェネレーションの期待と自覚

環境情報学部教授 熊坂賢次

5 . ネットジェネレーションのミッション

このようなネットジェネレーションの思考・行動様式とコミュニケーションのスタイル、そしてそこから推論される生活領域のヴィジョンは、これからの21世紀の日本社会の現実的な要請に対応できる一つの有力な指針ではないか、と思われる。実際に進行中の組織のネットワーク化、女性の労働観の変容（子供ができてフルタイムで働きたい）、高齢化の危機（家庭の内部ではもはや対応できない）、子供の教育危機（教室は密室で、閉塞している）など、多くの社会データが要請する問題を解決するには、ネットワーク環境とその申し子であるネットジェネレーションに期待するしかないと思う。その意味ではタプスコットのジェネレーション・ラップという主張は、確かにその通りで、ギャップがあるという事実認識以上に、いかに新しい世代に適合したネットワーク社会を創造するかが急務なのである。もはやマスメディア世代の時代ではなく、まさにネットワーク世代が、いかにこれからの社会の創造に期待されているかを、みずから自覚しなければならない、そんな時なのである。